

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

毎年1度開催されている仙台教区復興支援全国会議が、今年は6月29日から7月1日まで行われ、全国各地から60の方が参加されました。最終日の7月1日には、仙台教区の小教区で活動している教会の活動発表がされ、全国からの参加者の心を強く打ちました。今回は、4名の方の発表についてご紹介します。残り2名の方については、次号でご紹介させていただきます。ボランティアに来てくださいという呼びかけだけではなく、仙台の被災者の方々が、被災者に寄り添って信仰を生きておられる姿が、なによりのあかしとなっていることを感じました、と感想を述べる方がおられました。

最後に、今年4月に開設されましたFMM 亘理共同体についてご紹介します。

青森明の星短期大学の事例

カトリック浪打教会 田口 和宏

2011年3月11日午後2時46分、私は大阪の私学にいた。翌月から青森明の星短期大学に赴任することが決まっておき、一カ月後に赴任する東日本で、これほどの大震災が起きていることを思うと、何かしら自分がこれから被災地に赴くことへの使命を暗示しているように感じた。

しばらくして、本校での教員生活が始まっていった。震災のため、授業開始が1週間遅れたが、その間にも余震で停電が半日ほど続いた。一人暮らしを始めて間がなく、色々な生活必需品を揃えなければならなかったときだったが、石油ストーブの灯油を買うためのポリタンクがどこにも売っていなかったりと多少の生活の不便さを感じないわけにはいかなかった。

さて、赴任早々、学長から、「大震災の起きたこの年に、わざわざ京都から本校に来るのには、被災地の復興のために何か為すべき使命を持っているのではないですか」と、私の感じていた意気込みを後押ししてくださるようなことを仰っていただいた。私はそれをお聞きし、心の中で一層、「何とか被災地に行ってボランティアをしよう！」と改めて決意がこみ上げてくるのを感じた。そして、自分自身の研究テーマを「東日本大震災」の震災復興とボランティア活動を通して被災者に寄り添い、悲しみを共感し合い、気づいたこと、学んだこと、感化させられたこと等を論述してみようと思った。



大槌町旧役場跡前にて (2015. 3. 24)

日本の近世史上まれにみる未曾有の大震災を体験した東日本。日々、震災関連のニュースを見るにつけ、同じ日本人として心を痛めている人たちもたくさんおられることだろう。学校挙げてボランティア活動を援助してくれていることも伝えたい。カトリックのミッションスクールとして、「東日本大震災」にどう立ち向かってきたのか、何ができたのかを、この1年間の拙いボランティア活動を検証し、福音宣教の一助になればと思う。

《被災学生との出会い》

本校の学生には、被災地の県からの出身者も多く、実家が被災したために何らかの支援を受けている学生も5名程いる。その中で、一人の学生Tさんが私の「キリスト教と世界観」という授業で書いたレポートの内容に目がとまった。

震災による実際の被害の状況を把握することは難しかったが、当事者にしかわからない切実な思いがこもっていることが内容からも推察できた。私の授業の中で伝えたかったキリストのもっとも重要な掟「隣人を愛しなさい」を心に留め、被災時に他者から受けた支援を心からの感謝で受け止めている。どんなにか辛い苦しい体験があったのかもしれないのに、「隣人を愛しなさい」というその言葉に救われた思いを語っている。この文章を読んで、私は目頭が熱くなり、涙が自然と流れた。Tさんの心の清廉さ、優しさに心打たれたことと、授業で伝えたかったことが、これほどまでに生きた形で真実として私に返ってきたからである。

震災後1年2ヵ月あまり経過した2012年5月2日の「ボランティアワーク」の授業で、ボランティアの意義、役割を授業の中で伝えたいと思い、Tさんへ体験談を1年生の学生に話してもらえないかとお願いし、Tさんに話してもらった機会ができた。

30分ほどの時間であったが、Tさんの飾り気のない真実の話の中、言葉に詰まることもあったが、体験者しか語れない話の内容に聞く者皆が引き込まれ、心を打たれる学生、教職員が多かった。私もTさんの被災体験を初めて聞いて、生死を分かつような苦しい被災体験があったからこそ、人の心を打つ文章が発露し、人前で聴く者に勇気を与えられる内容の深い話が出来ると痛感した。

Tさんは、生き延びた体験の中で、どんなに命を分かつような苦しい状況の中にあっても、人は自分の苦しみを第一に思う存在ではなく、自分を支えてくれた家族や愛する人々の無事を、平穏を願うものだと教えてくれている。そして、生き延びた自分の使命を「誰かのために…」と訴えている。まさにキリストの第一の教え「人を愛しなさい」の言葉の真理を指示してくれている。この言葉を励みに、さらに復興ボランティアを続けていきたいと強く思った。

【Tさんのレポート】（一部抜粋）

私がこの「キリスト教と世界観」という授業を通して、これからの自分自身の生き方の指針となると思ったことがあります。それは「隣人を愛せ」ということです。

震災で被災した際、肉体的にも精神的にもとても辛い日々を過ごしました。津波に流されていく人や家は今でも夢に見ます。あの真っ黒い波の冷たさや恐ろしさは、きっと一生忘れることが出来ません。被災してから一番嬉しかったのは、県外の方や外国の方が私たちのために様々な支援をしてくれたことでした。「隣人を愛する」ということは、まさにこのようなことだと思います。私はその時の感謝の気持ちも一生忘れないでしょう。この感謝の気持ちと「隣人を愛する」ということも忘れられません。友達や親族が亡くなって、なんで自分が生きているんだろうと、苦しかった日もありましたが、隣人を愛するということ、自分を愛することでもあり、自他を許すということでもあるとこの授業で学びました。それから少し気持ちが軽くなったように思っています。私は、これからもこの「隣人を愛す」ということを忘れずに、大切な命を生きていきたいと思っています。積極的にボランティアにも参加し、それを行動に移していきたいと思っています。

《ボランティア活動》

2011年、夏休み中のボランティアの実践を考え、6月上旬ごろからインターネットで被災地でのボランティア情報を入手し、カトリック仙台教区がボランティア活動の管理をしていることが分かった。被災地までの道程を考え、一番近い釜石ベースに行こうと決め、8月22日から9月3日までの2週間の日程で申し込み、活動した。

1回目の個人的なボランティア活動を体験し、被災地ではたくさんのボランティアの手を必要としていることが分かった。さらに、教育的にもボランティア活動の重要性が叫ばれていることから、復興ボランティアに学生を参加させることはできないかと考え、教授会に提案していくことにした。実施のための企画書作成、震災ボランティア募集ポスター作製、参加予定ベースとの日程、人数調整、様々な書類を準備し、教授会に学生参加の提案をした。「はじめに」にも記述したが、学長の応援が実施までの一番の支えになった。カトリック校として、復興を応援することにいささかのとまどいもなかったのである。形としてどう実施できるかだけだった。

参加する学生へどういう形で支援できるか、学生への衣食住を支えるカリタスベースへの支援、災害保険をどうするか、様々な問題をクリアし、2012年3月18日から24日までの一週間、実施へとこぎつけた。大槌ベース6名、釜石ベース7名、大船渡ベース8名、計21名の参加を得て実施した。

被災地のあちこちで、山と積まれた瓦礫を目の前にし、学生たちは言葉を失っていた。被災地の復興を妨げている2,000万tにも及ぶといわれる瓦礫の処理を遅らせているのは、地域エゴ、自分さえよければという人間のわがままの様な気がしない。瓦礫の山を目の当たりにすると、心底、「みんなでなんとかしてあげようよ！」と、叫びたくなる。ボランティアに参加した学生たちは、私の願っていた通り、豊かな心の成長を見せてくれた。学生たちの春休みの震災ボランティア体験は、東奥日報、カトリック新聞に掲載された。学生たちは、人として真に大切なことを被災者との交わりを通して、学んでいくことができた。

その後、2012年から2014年の3月と夏休みに、学生とともに復興ボランティアに参加した。2013年3月に行った第4回目のボランティアでは、青森県地域大学間連携協議会により、本学主催としての青森県内6大学の学生による合同震災ボランティア活動を行った。

被災地では、街も綺麗になり、見た目には復興が進んでいるように見える。しかし、仮設に住まわれている人々の中には、まだまだ重い十字架を背負って暮らしている方もたくさんおられる。悲嘆にくれる方の十字架を共に担い、一人ではないことを伝えていきたい。仮設という住環境面では、十分に満足が得られない状況で1年以上も住み続けておられる。いつ元通りの生活が訪れるのか、先の見えない生活設計の不安の中で暮らしておられる。そのような被災者に寄り添い、何らかの手助けを続けていきたいと思っている。



大船渡ベースでの活動風景



【学生の感想文】

・震災ボランティアとは、被災者の気持ちに寄り添い、共感し合い、共に涙し、未来への希望を共に作り上げていく姿勢そのものではないでしょうか。

・私の考えるボランティアとは、金銭の援助や物的援助だけではなく自らを使い人々の生活に基づいた必要とされた手助けをすることだと思います。被災者の心の傷は私たちの想像をはるかに超えるものではないでしょうか。一時的な助けではその傷の深さは埋まることはありません。しかし、どんな小さな行動でも長期により積み重ねることにより、その心の傷は和らいでいくのではないのでしょうか？ 被災地域に各地から人が集まり様々なボランティア活動をする。そのことで被災者と我々のようなボランティアを行っている人々との信頼関係、絆が生まれ今後も様々な支援の輪が広がることでしょう。

カトリック四ツ家教会の取り組み

カトリック四ツ家教会 中村 美栄子・戸澤 恭子

①活動開始の経緯

震災前、盛岡市内3教会（志家、上堂、四ツ家）の有志が集まり、「盛岡ホームレス支援の会」として、毎週交代でホームレスに食事提供を行い、必要な物資を配布し、行政に繋がるよう支援をしていました。2010年12月には、そのホームレスの方々もみな、生活の場を得て、私たちの手を離れていきました。その3ヵ月後の2011年3月11日、あのような大震災が発生したのです。神様が呼んでいる、私たちの手を必要としている、との思いで動き出しました。

②活動の変遷

沿岸に縁故のある方が、早速、情報収集をし、必要と思われる物資を四ツ家教会を中心に集めました。また、遠方の知人などから送られてきた物資などを分別し、沿岸の教会や避難所へ搬送しました。ガソリン不足の頃は、遠野教会が中継地点になってくださいました。

この活動時、「ホームレス支援の会」と名乗ることが憚られ、3教会の有志であることを思い、ナザレの聖家族に倣い「ナザレの会」と命名することにしました。「必要な人に、必要なときに、必要な手を！！」をモットーにして、以後この名前で活動しています。

2011年4月から6月頃までは、物資の提供や避難所（宮古・山田・大槌・釜石・大船渡・陸前高田など）への炊き出しを行いました。避難所での活動時、避難所におられる方々が、セーターなどを丸めて枕代わりにしているのを目にし、せめて寝るときくらいは、ゆっくり頭を休めて眠られるようにとの思いで、枕作りを始めました。県内外の多くの方から布を提供していただき、約2,000個の枕を作って避難所に配ることができました。



その間にも、がれき処理、釜石教会、宮古教会からのバザーのための物資要請にこたえて物資を集め、購入して運び、またバザーの手伝いもしました。

写真洗浄では、海水に浸ったアルバムや写真を段ボールで持ち帰り、四ツ家教会の信徒にも洗浄してもらいました。その写真の中に、私の高校の恩師でもある釜石教会の信徒の方の写真をを見つけました。釜石教会を通じてその方の仮設住宅を探し、早速訪ねました。

2011年9月当時、その信徒の方が住んでいる仮設住宅には、まだこのグループも訪問していないことを知り、住民に声掛けをしてもらい、定期的に訪問することになりました。

月2回の訪問で、ぬり絵、絵手紙、編み物その他の手作業を共にし、昼食を提供しました。この団地では、もう自分たちで自立していけるから定期的に訪問することは終わりにしてよいと言われ、2013年2月で終了となりました。



釜石大畑仮設住宅 お花見会

その間にも、近隣の仮設住宅団地からも訪問要請があり、そちらの仮設にも行くようになりました。同じ団地の2ヵ所の談話室に月1回、2012年1月から現在も継続しています。

こちらでも、手作業などをしながら昼食会をしていましたが、この昼食会は2014年7月まで続け、現在はお茶の会として住民の話し相手になることを心がけています。

2014年5月、NPO法人カリタス釜石の引越し・開所式に参加し、以後、毎週1回お手伝いとして通っていましたが、今年3月から隔週に変更しました。

仕事としては、教会内のサロン「ふいりあ」、仮設団地の談話室でのお茶っこサロンと傾聴です。

また、今年4月には、仮設住宅から復興住宅へ、または仮設住宅から仮設住宅への引越しの手伝いも行いました。

宮古教会には、ふれあいマーケットの手伝い(8回)、札幌カリタス宮古ベースの手伝いとして仮設住宅の談話室にもうかがいました。また、ナザレの会として住民に直接触れあう機会を探して、宮古教会の信徒の方にみなし仮設住宅を紹介していただき、2012年11月から現在まで、月1回の昼食会と傾聴を続けております。今でも昼食会を楽しみに待ってくださいます。高齢者が多く、カラオケ、お話し合い、軽い体操などをして喜ばれています。



宮古市みなし仮設での昼食会

③現況と課題

現在は、上堂と四ツ家の2つの教会から7名が交代で、自家用車で活動へ行っていますが、こちらでも高齢になり、いろいろと身体的な不調もでています。

早朝からの長時間の車の移動（往復約5時間）で、腰痛を起こしたものもあります。腰の保護を工夫したり、あまり負担にならないようにと、一人で月2回くらいまでの計画を立てています。教会内で何度かボランティアへの参加を呼びかけていますが、今のところこれ以上の増加は見込めそうにありません。

被災の記憶が薄れてきていると言われてはいますが、小教区共同体においても被災者に対する思いの温度差を如実に感じています。しかし、実際に活動している私たちが声を出しても、単なる同情的な反応を受けるだけです。

ここで、指導的立場にある方々にお願いしたいと思います。それは、同じ被災県の教会として、今一層の兄弟的愛の心を啓発していただけるよう、種々の機会をとらえて信徒に働きかけていただきたいということです。

カトリック一本杉教会の取り組み

カトリック一本杉教会 淀川 喜正

①活動開始の経緯

一本杉教会は、震災1ヵ月後の4月17日に、仙台市内で被災地に一番近い小教区ということからなのか、仙台教区サポートセンターから支援物資の保管・配送等の役割を受け持つ教会としての要請がありました。

教会は即検討し、この非常事態の中での要請は受け入れるべきと決定し、活動を開始しました。活動内容は、基本的に支援物資を被災者に届けること、作業を伴う活動はしないボランティア活動。それらは、この未曾有の大災害に立ち向かう教会としての使命感に満ちたものでした。

②活動の変遷

仙台教区サポートセンターが3月16日に設立され、約1ヶ月半が経過した4月25日に一本杉教会は活動を開始しました。その後、6月初旬の仮設住宅に移るまでの期間は、前述のように支援物資の保管・配送等に終始しました。

仙台教区サポートセンターの方針「キリストの愛の実践は、決して教会内部に向けられたものではない。『まず地域の困っている人に寄り添ってください』地域優先に徹することである」という呼びかけに呼応し、メンバーの中より支援物資等の活動だけでなく、被災者と直接接触し、顔を間近に見て自分たちの思いを伝えたいとの動きが自然に出てきました。そうなれば「行動」あるのみです。

仙台市内の被災地で一本杉教会にほど近く、市内で2番目に大きな「荒井東通仮設住宅（戸数197）」に出向くことになりました。もちろん、誰もが初めてのことなのでおそるおそる、手探りの状態での接触には勇気がいりました。



幸い、私たちの支援申し出に対して、喜んで受け入れたいとのことで活動拠点を得ることが出来ました。メンバーの中には、自分が被災者でありながら、もっと困っている人たちを助けなければという思いに駆られて参加した方も何人かおられます。

秋口に入り、仙台教区サポートセンターからの支援を受けての一本杉教会での活動は終了し、仙台教区サポートセンターを離れた小教区独自の活動に移行し、再スタートしました。

組織の再編成とチーム名も改めることになり、新組織は一本杉教会、西仙台教会、豊屋丁教会の3つの小教区が集合したものに、チーム名は仮設の皆さんに親しみをもって認知された“カリタスさん”を冠した「カリタス若林SC(サポートセンター)」に変更いたしました。



コーヒータイム



みんなと歌おう



七夕飾り製作

③現況と課題

活動への協力者は、当初5～6名と多くはなかったのですが、日に日に賛同者が増え、チーム再編成後には、登録者数が35名になるまでに増員されました。(実際の活動人数は約25名程度)内容は、初めの2カ月は、支援物資の提供を中心に動き、仮設の状況変化にあわせて段階的に変わり、現在は“コーヒータイム”を通して、被災者との間に入り、話を聴く「傾聴」が主体となっています。

時間の経過とともに変わってきてはいますが、仮設の皆さんが楽しまれ、癒しの時間が共有されるように、“コーヒータイム”は毎回、それ以外は季節のイベントを仮設の自治会との共催で行っています。例えば、春は「花見会」、夏は「七夕飾り」や「夏祭り」、秋は「芋煮会」、冬には「クリスマス会」など。

訪問の頻度は、2011年度中は、月2回、それ以降はメンバー増加に伴い、月4回に増やし、今年の3月まで継続していました。(1回の訪問につき、5～10名程度で、3班に分け輪番で活動している)。しかし、現時点で入居世帯数および人数は、79世帯150人と当初の約40%まで減り、今年の暮れには、当初の世帯数の約90%の退去が確定しています。

長期間にわたる活動は、メンバーの高齢化やモチベーションの維持を計るのは大変なことで、一旦、リセットして再募集をとの意見もありました。仮設の入居者数の減少が顕著となった現在、月2回に訪問回数を減らして継続しています。

仮設での反応は、残念がる声が多く聞かれ、心苦しい対応となりました。荒井東通仮設住宅は、仙台市の方針で来年5月初めに閉鎖が決定されています。

このような状況下で、来春までとそれ以降をどうするかがこれからの命題となっています。

マリアの宣教者フランシスコ修道会

亙理共同体開設

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

マリアの宣教者フランシスコ修道会（以下FMMと訳す）の福者マリア・アスタの記念日である2015年4月7日、宮城県亙理町にFMM亙理修道院が開設されました。福者アスタは、FMMの創立者マリー・ド・ラ・パッションによって中国へ派遣され、人々の中で、人々と共に、ひっそりと隠れた生活をされましたが、その死後、多くの人々の証言によってその聖性が認められた方です。

5月22日、「私たち共同体のモデルはこのマリア・アスタです」と、Sr.内田を責任者にSr.大垣とSr.柳（りゅう）の3人のメンバーへのインタビューは始まりました。

Sr.内田は、昨年1月に南アフリカのミッションから帰国したばかり。「FMM韓国管区、創設50年目の節目に、日本に派遣されました」とは、Sr.柳。「それまではホームレスや、寄宿舍で100人から200人の食事を作っていましたので、今の3人の共同体のために料理をするのは難しいです」とユーモアを交えながら、流暢な日本語で話されます。Sr.大垣は、戸塚の聖母の園に長くおられ、20年間ずっと教誨師を続けておられました。今回の異動でその奉仕を終え、亙理に来られました。

「亙理に派遣されるまで、私たちはまったく違う場に派遣され、共に生活をしたことがありませんでした。そのため、今は、共同体作りに重心を置いています。なぜなら、主イエスを中心にした兄弟・姉妹的な交わりを、宣教の源泉としたアシジの聖フランシスコの生き方が私たちの修道会のカリスマのひとつだからです」とSr.内田。

「同じ修道会であれば誰もが知らない人はいないと思われがちですが、260人の姉妹をいただくFMM日本管区のように、会員の多い修道会であればあるほど、全員がお互いをよく知っているということはあまりありません。祈りと姉妹的交わりを大切にすること。1、2時間かけてする夕食をすることはさらにありますよ」とSr.大垣。

亙理の地に修道院を開いた目的は、福島県南相馬にある原町共同体と協同すること。宮城県南4つの教会のサポート。そして、被災地の方々の支援のためだそうです。

開設から1ヶ月。少しずつ生活が落ち着き、信徒の方々、亙理教会を訪れてくださるボランティアの方々、地域の方々との関わりを通して、具体的に何が必要とされているのかを識別中とのこと。「ここ、亙理に住み始めて気づいたことは、出会う方々みなさんが、親切で、明るく、

心を開いて私たちを迎え入れてくださったことです。「試練を経た人は優しいのかもしれませんが」と、シスター方が、地域の人々の温かい心に触れ、人々へ奉仕する力をもらっておられる様子がわかりました。笑いが絶えなかったインタビューを通して、シスター方のフランシスコ的な単純さと明るさが、多くの人々に伝わっていくことだろうと感じました。



(左から) Sr.柳、Sr.大垣、Sr.内田

